ヒトラー・ユーゲントの光と影
―魅力にとりつかれた若者たちと反抗した若者たちからみえるもの―

08K005　江畑 沙穂

はじめに

ドイツのナチス[1]は若者中心の政党であったと言われている。実際の数字や統計を見てもそれは明らかであり[2]、ナチスは将来のドイツを担う若者たち、ひいては子どもたちの育成に力を注いでいた。その育成のための組織こそがヒトラー・ユーゲントである。ナチス時代、子どもたちの多くはこのヒトラー・ユーゲントに属し、ナチスに関わる活動を行っていたとされている。

私がこの組織に興味を持ちだしたきっかけは、ワイマール共和国と当時のドイツ青年運動に興味を持ち、３年生のときのゼミ・テーマとして調べたことだ。19世紀から20世紀にかけてのドイツ青年運動を調べていくうちに、青年運動の終わり頃にかけて台頭するヒトラー・ユーゲントの存在に着目するようになった。ドイツの中でも特異な時代であったワイマール共和国に着目したことがテーマを選ぶに至ったきっかけである。

青年運動が活発であった時代の次の世代の子どもたちは、どんな考え方を持ち、ナチスにいかに翻弄されていったのか。中でも私が興味もっているのは、その子どもたちを引き付けたヒトラー・ユーゲントの「魅力」とはいったい何だったのかということである。時代的風潮や政治的な要素もあったとはいえ、子どもたちは子どもたちの感性のままに、その魅力にとりつかれたように思えたからだ。確かに、ヒトラー・ユーゲントへの入隊は強制的なものへと移り変わっていくのだが、当初はそういった強制力とは全く関係なしに、子どもたちは自分から志願してこの組織に入っていったことがわかっている。親の反対を押し切ってまで、このヒトラー・ユーゲントに入りたいと願う子どもたちが多くいたという背景にはいったい何があったのか。当時、ナチスは厳しい戦局をひた隠しにしながらドイツ中を戦争の渦へと巻き込んでいった。それは、事実を知らされていないまま、もしくは知っていながらもナチスの持つ魅力に人々が惹き付けられていったからだ。その魅力は子どもに対しても同じであったと私は考えている。だからこそ、この「魅力」について子どもたちがどう体験したかという視点から考察したいと思ったのである。
考察の方法として、文献等から得た実際の証言や、その当時を描く小説などをもとに、当時の子どもたちの心理状況や思想、周囲の環境、ナチス時代の子どもたちが知らずに受けていた影響や変化を明らかにしていきたい。そして、子どもたちはヒトラー・ユーゲントの何に憧れ、惹かれて行ったのか。そしてその憧れはどのように変化していったのかを考察していきたい。

また、もうひとつの存在として、この魅力的であった組織に反抗していった若者たちのことについても取り上げたい。ヒトラー・ユーゲントの魅力にとりつかれることなく反抗した若者たちはどんな考えを持ち、その時代に反する行動を起こしたのか。

これら二つの相反する側面を時代背景から比較することを、まずは一つの軸として考えたい。そしてもう一つの軸として、その後の変化、特にヒトラー・ユーゲントだった者たちが大人になってからどんな考えや思想に行きつくのか、すなわち、戦後のドイツにおいてのヒトラー・ユーゲントの姿についても見ていきたいと思う。

そして、最後に現代と比較してみての考察も行いたい。これらの魅力は恐らく現代人には理解できない

部分もあるし、理解できる部分があると思う。穢れを知らない子どもたちがその「魅力」にとりつかれる理由はなんだったのかということを踏まえ、現代人の私から見てそれらはどう映るのか、結論として、これらの魅力に惹きつけられたがゆえに起こった状況は現代社会においても起こりうることなのかということにも、関心を向けたいと考えている。

第１章　ヒトラー・ユーゲントの歴史と概要

1. 歴史的背景―青年運動からの派生

ドイツ青年運動のルーツとしては、18世紀後半に起こった疾風怒濤[3]やブルシェンシャフト[4]などがあるが、正式な出生は、それらの運動が起こってからおよそ100年後の1901年11月４日、ベルリン郊外シュテグリッツであった。

青年運動がおこる前後の1860年から1900年にかけてのヨーロッパは、かつてない経済的・技術的進歩を経験し、人々が平和に過ごすことのできた時代であった。しかし、皮肉にもそれらの要素が文化的危機を招いてしまう。ドイツ青年運動は、若い世代に何も提供することのできないこの時代の文明に対する非政治的な抵抗意識、生命力・熱気・感情・理想を欠いた文明に対するプロテストとして、若者たちが次々と目覚めたことから始まった。また、権威的なものが中心であったヴィルヘルム・ドイツにおけるナショナル・イデオロギーに若者が反感を抱きはじめていったことも、大きな理由だろう。青年たちは、自身の存在を自覚するのと同じくして、当たり前のように自分たちを抑制している大人の世界とその価値観、学校や家庭の権威に疑問の目を向け始め、家庭・学校に代わる自己教育の場を戸外に求め、野山を渡り歩くようになる。これがワンダーフォーゲル運動であり、ドイツ青年運動の発端である。これらの運動は大人社会の後継者として従属させられ、教化の対象とされることに反抗した若き中産階級出身者の個人的・感情的・逃避的な運動であった[5]。

この時期の青年運動の特徴としてあげられるのは、基本的に非政治的であり、個人主義的な傾向を持っていたということだろう。彼らは全人格的な人間になることを望む一方で、ロマン主義的、中世的な性格も持っていた。ひたすら渡り歩くことを自己目的とすることは、芸術であり、意味のあるものであり、参加する者は観察力を研ぎ澄ませて、祖国と人民にもっと親しまなければならないという考えを掲げていた。これらの考えは、自分の国についてもっと立派で完成された像を持ち、国との同化と国への愛が個人的な体験に深く根ざした新しいドイツ人を作り出すはずという、当時のドイツ青年の溢れんばかりの情熱があって取り組まれていったものであった[6]。また、この青年運動は大都市中心であり、かつ中産階級出身者中心の運動であった。こうした青年運動のエリート意識は、この運動が大衆組織になろうとしてもなれなかった原因でもある。運動のエリート意識は大衆運動と相いれなかった。それは、中産階級の庇護下ではぐくまれた運動だったためであった。

青年運動の代表であるワンダーフォーゲルは、1896年シュテグリッツにてヘルマン・ホフマンが始めた速記術クラブが源流である。このグループからワンダーフォーゲルと呼ばれるドイツ青年運動が生まれた。両親や教師や監督者の付き添いではない本物の旅を理想とした活動の根底には、権威に対する未熟な反抗が存在していたとされる。はじめは仲間内のみの小グループがのちに全ドイツに広がり、ドイツの至る所で新しいグループが誕生していった。また、青年達は山野を渡り歩く大旅行を経験する中で、ワンダーフォーゲル独自の文化の芽を育てるようになっていく。その中でも特に音楽分野の発展がみられた。

しかし、音楽の発展などは青年運動における副産物であり、ドイツの若い世代のもっともすぐれた多くの人々は、青年運動の奥底にある真正の体験、キャンプファイアーの雰囲気、友情など、生涯忘れることのできない貴重な体験をこの青年運動を通して学んでいったのである[7]。

これらから、青年運動は利己心の重要な矯正役であったとみることができよう[8]。他方、学校や家庭は、青年運動が全メンバーに要求した内部規律や同志関係をこの年齢の少年少女に与えることが出来なかった。青年運動は、若い世代に自分なりの生き方を選ぶ権利を認めようとしない社会に対して生じた、自然発生的で必然的な反乱だったのである。

1910年から1913年までの間に、青年運動はドイツ中に広まり、オーストリアとスイスでも定着していった。その中で様々な組織が生まれ、それらを繋ぐより大きな規模の統一体を作り出す考えが広がっていった。そこで出来上がったのが自由ドイツ青年団である。自由ドイツ青年団は1913年10月11日、ホーエ・マイスナーでの集会にて結成された。度々問題として取り上げられたワンダーフォーゲルの年長者問題を解決するべく、年長者をとりまとめる大きな組織として作られた。組織の中での行動方針、モットー、タブーなど様々な規律が生まれるが、実際は組織としてうまくまとまりそうでまとまらない組織であった。その要因は、主目的が渡り歩きにあるワンダーフォーゲルと、別の目的をはらんでいた他の諸組織との間で明白な意見の対立があったからとされる。

ドイツ青年運動の全歴史は分裂とかりそめの再結合の歴史であり、初めは非政治的であった青年運動も、しだいに組織が増えるにつれてその目的も変化し、だんだんと政治的な要素を含んだものになっていく。特に第一次世界大戦は、若者たちに大きな影響を与えた。

青年運動のメンバーにとって、戦争は現実のこととは思えない信じがたい出来事であった。彼らの世界はのんきな渡り歩き、夢想、歌唱の世界、絶対平和の世界であり、戦争の凶暴な破壊とは正反対だったからだ。だが、多くのグループ指導者が招集、あるいは志願兵となり、戦争へと駆り出されていった。その中で青年運動は開戦後細々と再開され、まずは軍隊にいるメンバーと接触を保つことが活動目的として最重要とされた。

ワンダーフォーゲル出身の兵士たちは一体どうだったのであろうか。彼らのほとんどは正当な理由があって戦っていると信じ、早々と凱旋出来ると思っていた。しかし現実の戦争は残忍であり、青年運動のメンバーを含む何千人もの学生が突撃により次々と命を落としていった。「家に帰ってきてもダンスをしたいなどとは思わないだろう。・・・そして彼らの信念は壊れてしまった」というあるワンダーフォーゲルの詩人が残した詩が物語っているように[9]、戦争の体験による衝撃や幻滅、そして孤独感はすさまじいものであった。この状況下で戦い続けた主な理由は、ほかに可能性がなかったことと、愛国的義務感から戦争目的を問い直さなかったことが、考えられる。

開戦から一年もたたないうちに、運動の若返りと一定年齢以上のメンバーの引退を求める声があがった。これは、戦地に赴くメンバーへの裏切りとなるおそれがあったが、やむを得ないものであった。これにより、兵役年齢に達しているメンバーの比率が高かった「自由ドイツ青年団」は、中でも手痛い打撃を受けた。そして、先にも述べたように、運動が次第に政治的になっていくという変化も見られるようになっていった。結果として、およそ14000人のワンダーフォーゲル・メンバーの多くが前線での塹壕を体験し、４人に１人は二度と帰ってこなかった。また、1918年11月の停戦後、ふたたび青年運動に関心を示したものは半数を下回り、戦争の体験により渡り歩きやキャンプ、グループ活動に興味を持たなくなっていった。青年運動の第一局面が終焉を迎えようとしていた。ワンダーフォーゲルがプロテストの相手としていたヴィルヘルム・ドイツの社会は、戦争で一掃されてしまったうえに、戦後のインフレ、永続的な政治的危機の中で時代遅れとされていった。古いワンダーフォーゲルの精神のほとんどが新しいドイ

ツでは完全に場違いだったのである。

その後、第二の青年運動の担い手として、ワンダーフォーゲルに比べ集団的なことを重視したブントが台頭し始める。ブントは主に騎士団を理想として掲げており、かつてのワンダーフォーゲルが目指した理想とはかけ離れたものであった。特に義勇軍はワイマール共和国に背を向け、軍人的な要素を持っており、ブントは右翼的傾向をもっていた軍隊まがいの組織であったため、運動はよりナショナリスティックなものへと変化していった。これら青年運動内の強力な右派は、この頃頭角をあらわし始めたヒトラーに対する共感はあったものの、次に述べるヒトラー・ユーゲントには加わらなかった。とはいえ、ナチスは確実に青年たちの支持を得ることになっていくのだが、それは次で論じることにする。

以上の考察から、非政治的な目的から始まりロマン主義的な性格をもっていたワンダーフォーゲル運動は、第一次大戦を経験したことにより、運動の性格そのものを変化させてしまったことがわかる。これには青年達の心境の変化、戦争体験、またワイマール共和国の不安定さなど様々な要因があり、青年運動は幻想的でロマンティックなものからより現実的な問題を見るように変化していったと考えられる。

2. ヒトラーの「新しい人間」育成―ヒトラー・ユーゲントの成立

ワイマール期にナチスは「青少年を手に入れる者は、未来を手に入れる」という認識の下で、若者の教育に着手していった。なぜ、若者の教育に着手したのか。それはナチスにおいて、千年王国を実現するためには、この先の未来を担う若者たちを「新しい人間（ナチ的人間）」へ育成することが大切で、その目的に見合った教育が不可欠だったからである。ヒトラーは「新しい人間」のための教育として、「真に健康な肉体の育成、向上」、「人格の発展、とくに意志力と決断力の促進」、「最後に学問的訓練」が必要であると語っている[10]。そして、ナチスは帝国内相フリックの提言した「いっさいの思考と行動において奉仕的かつ献身的であり、みずからの民族に根差し、その国家の歴史と運命とに全面的にかつ分かちがたく結びついた政治的人間」の育成を目的とし、「新しい人間」、ナチ的人間の育成・教育を担うことになったのが、ヒトラー・ユーゲントであった[11]。

しかし、このヒトラー・ユーゲントは、当初ヒトラーの命令で作られた組織ではなかった。ヒトラー・ユーゲント指導者バルドゥーア・フォン・シーラッハ[12]は「総統自身から出たもの」と書いているが、ヒトラーの意志・命令で作られたものではなく、実際はドイツ各地でナチスにシンパシーを抱く若者たちが自発的に結集し、ヒトラーがそのうちの一つの組織を承認するという形で生まれたものであった[13]。しかし、ワイマール期において、ヒトラー・ユーゲントはまだまだ少数派であった。ナチス全体は「若さ」を誇示して成功をおさめたが、ワイマール期の多様な青少年団体から若者たちを大量に奪い取るほど魅力あるものを提供できなかったからである。青年たちを引き付けるにはまだまだであったヒトラー・ユーゲントの状況が一変するのは、ナチス政権掌握後のことであった。

3. 組織と内容

ナチス政権掌握後のヒトラー・ユーゲントは、「ナチ的人間」を育成する教育機関へと変貌を遂げていく。ヒトラー・ユーゲントは、ヒトラーの政権掌握前は団員数10万前後の組織にすぎなかったが、他の競合組織を解散・併合し、またそれまでは未組織だった青少年を掌握して急速に団員数を伸ばし、青少年を独占していった。実際のところ、多少の操作はあるものの、１年間で200万人以上増えたという統計があり、とくに、14歳までの年少組織の増加が顕著であったという[14]。それらについては表1を参考にしてほしい。

ヒトラー・ユーゲントへの入団が法的に強制されるのは、ヒトラー・ユーゲント法が制定される1936

年のことである。つまり、36年以前の団員数の爆発的増加は決して強制されて入団をした子どもたちが大勢いた、というわけではないということだ。なぜ、ヒトラー・ユーゲントは子供たちを集めることに成功したのか。これについてはのちの章で詳しく述べる。また表２のように、1933年４月１日以降には規律の整った組織整備も行われ、ヒトラー・ユーゲントは拡大の一途をたどった。

	ヒトラー・ユーゲント	ドイツ少年団	ドイツ女子青年団	ドイツ少女団	総　計
1932年末	55,365	28,691	19,244	4,656	107,956
1933年末	568,288	1,130,521	243,750	349,482	2,292,041
1934年末	786,000	1,457,304	471,944	862,317	3,577,565
1935年末	829,361	1,498,209	569,599	1,046,134	3,943,303
1936年末	1,168,734	1,785,424	873,127	1,610,316	5,437,601
1937年末	1,257,078	1,884,885	1,035,804	1,722,190	5,899,957
1938年末	1,663,305	2,064,538	1,448,264	1,855,119	7,031,226
1939年末	1,723,886	2,137,594	1,502,571	1,923,419	7,728,259

表1：ヒトラー・ユーゲントの団員数（原田一美『ナチ独裁下の子どもたち』62頁）

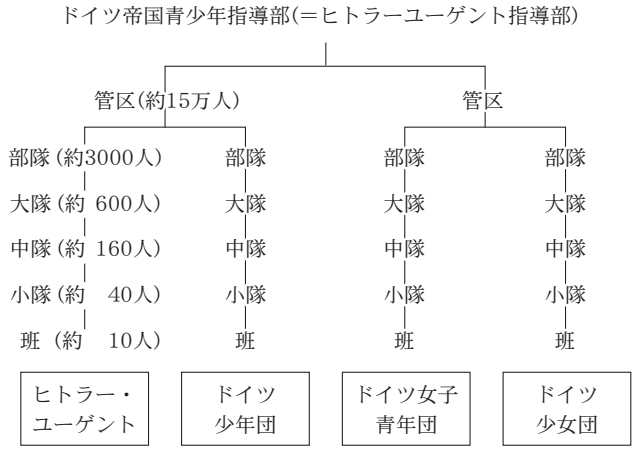

表2：ヒトラー・ユーゲントの団員数（原田一美『ナチ独裁下の子どもたち』63頁）

他方、組織の急激な拡大によって、膨大な数の指導者が必要となり、指導者不足に悩まされることとなった。この問題への対処として、全国に指導者養成所が作られたのだが、うまく機能せず、指導者不足問題はナチスの終焉まで尾を引く問題として残るのである。

ヒトラー・ユーゲントの主な活動は、ワイマール期ではビラの配布や集会への参加、デモ行進などのプロパガンダ活動が多かったのに対し、 第三帝国時代に入ると青少年の「教育」活動に専念できるようになり、活動内容も充実していった。特に肉体的鍛錬が重視され、野外スポーツや体育などに重点が置かれた。また、「夕べの集い」という場でのナチスの世界観教育、合宿なども重視され、これらがヒトラー・

ユーゲントの基本的な活動とされた。ここまで見ると、20世紀初頭以来のドイツの青年運動が培ってきた活動スタイルを多く取り入れていたことがわかる。しかし、大きな違いは個々人の自己教育を重視する青年運動とは違い、ヒトラー・ユーゲントでは活動を通してナチスの世界観と規律を青少年にたたきこもうとするねらいがあったことだ。それまでの青年運動の活動内容に共通する部分はあるけれども、根本的な考え方、教育理念、ねらいが全く違っていたことを、ここに強調しておきたい。

図1：1933年ころのヒトラー・ユーゲント。まだ制服が決まっていない。
（原田一美『ナチ独裁下の子どもたち』55頁）

ヒトラー・ユーゲントには以上の活動のほかに、青少年たちを引き付ける魅力が数多くあった。それらについて詳しくは次の2章で詳しく取り上げる

しかし、いいことづくめではなかった。たとえば、ヒトラー・ユーゲントとその周りを取り囲む組織との対立が頻繁に起こったのも、事実であった。次にそうした対立の代表例として、ヒトラー・ユーゲントと学校問題を取り上げようと思う。

4. 学校とヒトラー・ユーゲントの対立

さらなる影響力の拡大を図るナチスとヒトラー・ユーゲントが次に目指したものは、ヒトラー・ユーゲントの団員が所属する学校への介入であった。これによって、学校への影響力を増やすことで、学校の協力も得られると同時に、生徒の拘束時間を増やすというねらいもあったのである。それまでは週２日の午後のみがヒトラー・ユーゲントの活動にあてられていたが、1934年には水曜午後と土曜丸一日（「国家青少年の日」として規定）がヒトラー・ユーゲントの活動に充てられることとなった。しかし、学力低下などの目に見えた問題が発生したため、教師や親はこの制度に不満を持ち続け、結局1936年ヒトラー・ユーゲント法発布後に廃止され、当初の週２日の午後のみとなった。

生徒の拘束時間の拡大が失敗に終わった後、ヒトラー・ユーゲントは子供たちを指導する側である教員人事に介入し、教師へ圧力をかけていく。こうして、学校や教師がヒトラー・ユーゲントに協力しなければならない状況に陥っていったのである。とくに団員の勧誘では、教師に勧誘を強制させ、勧誘活動に積極的に取り組まない教師は懲戒処分を受ける恐れもあり、中でも昇進を気にする教師は積極的にならざる

を得ないということもあった。

さらに、教育自体のナチ化も積極的に行われた。ヒトラー・ユーゲントという組織そのものだけでなく、学校教育の場から「ナチ的人間」を育成するための条件が整えられたのである。ほどなくして、カリキュラムや教師の指導要領、教科書がナチ的要素の強いものへ変貌していった。最終的には教師をナチ化する組織的な動きもみられるようになり、まずはヒトラー政権掌握後に、ナチ党に敵対する視学官、校長、教師は教職から追放され、その後教員研修所が設置され、そこで教師はナチスの世界観を叩きこまれたのである。

また、ヒトラー・ユーゲントの慢性的指導者不足の解決策として教師が利用されることも少なくなく、教師以外の仕事、ナチ党組織の種々のレベルの指導者としての仕事が加わることになり、教師の負担が大きくなったことで、教師が魅力ある職業ではなくなってしまったのである。

こうした教育全体を侵略するかのようなヒトラー・ユーゲント上層部の動きは、だんだんと教育現場の崩壊を招いた。宿題をしてこない、教師の言うことを聞かない、学校行事の妨害、器材の破壊、教師に殴りかかる、などといったことが日常茶飯事となり、ヒトラー・ユーゲントの「粗暴化」は深刻化し、学級は崩壊していった。加えて生徒の学力低下も問題視されるようになった。ヒトラー・ユーゲントでの活動が重視されたため、学校での活動を軽視する生徒が増加しことで学力が下がり続けたのである。ナチス期にはこれが頻繁に取り上げられるほど深刻な問題で、学校教育をも管轄下に置こうとしたヒトラー・ユーゲントの野心は学校教育の混乱、生徒の学力低下という結果をもたらしたのだった。

ナチスに関心のない親や教師からしてみれば、ヒトラー・ユーゲントは目の上のたんこぶのような組織であっただろうし、ナチスの強制力が強まるにつれ、ナチスをあまりよく思わない者たちの精神的な負担、不満、葛藤は大きくなった。先に対立と書いたが、ナチスの権力がさらに高まり、独裁的な強制力が多方面に及ぶにつれて、親や教師たちが刃向うこと自体許されない風潮が強くなったことから、私たちの知る独裁的で強制力のある恐いナチス像が窺えるようになる。対立の図式が崩れる決定的な要因となったのは、1936年に成立した「ヒトラー・ユーゲント法」と1939年の施行令等で、合法的手段でナチスの権利が独裁的になったことだろう。親や教師たちは、目に見える形でナチスの圧力から逃れられない状況へ追い込まれていったのである。

一方の子どもたちは、ヒトラー・ユーゲントの持つ魅力に引き寄せられ、知らず知らずのうちにその強制力へと囚われていくことになる。そこでつぎに、短期間のうちに多くの子供たちを魅了したその「魅力」とはどんなものがあったのか見て行こう。

第2章　ヒトラー・ユーゲントの魅力とは

ヒトラー・ユーゲントを語るうえで私が最も興味深いと思ったのが、この組織の魅力だ。まず、その魅力はヒトラー政権の持つ強制力とは全く異質のものであったということを、ここではっきりさせておきたい。これをふまえ、その魅力とは一体どんなものであったのか、子供たちや若者にどのような影響を与えたのか。まずは、実際にヒトラー・ユーゲントに属していた者たちの視点から考察していこう。

1. 体験者の目

①低所得者にとっての魅力

まず一つめの魅力として、帝政期からワイマール期のドイツ青年運動と比べ、貧しい層の子どもたちに

対してヒトラー・ユーゲントへの道が開かれていたことがあげられる。1章で述べたとおり、ドイツ青年運動はその中心が大都市にあり、かつ中産階級中心のエリート志向の高い運動であったため、結果として大衆的な運動とはならなかった。他方、ヒトラー・ユーゲントでは、20世紀初頭以来のドイツ青年運動が培ってきた活動スタイルを取り入れながらも、それらがすべての階層に開かれていたことは大きな魅力であり、身分に関係なく多くの子どもたちを惹きつけた。実際に週末のキャンプ生活や遠方への旅行などは、普段旅行をすることのない労働者の家庭の子どもたちに大きな印象を残している（図２、図3)。

図２：ヒトラー・ユーゲントのキャンプ
（原田一美『ナチ独裁下の子どもたち』69頁）

図３：徒歩旅行に出かけるヒトラー・ユーゲント団員
（原田一美『ナチ独裁下の子どもたち』68頁）

「私はある日、ヒトラー・ユーゲントの夕べの集いに誘われました。そこで行われていたことは、私の気に入りました。私は演劇サークルに入りました。テニスをすることもできました。こんなことは、私の家族の経済状態ではけっしてできなかったでしょう。歌を歌ったり、フォークダンスのサークルに入ることもできました。私がヒトラー・ユーゲントに入りたいと言ったとき、母がなぜ喜ばなかったのかまったくわかりませんでした。」（当時ベルリン在住の少女の回想）[15]

「そこ（＝ドイツ少女団）には、いろいろな気晴らしがありました。遊びもおこなわれたし、私の両親にはお金を出せないところにも行くことができました。あれやこれやを体験できました。こうして、わたしたちは、多くのことを見学したのです。」（ある少女の回想）[16]

当時のすべての人々がそうであったとまでは言えないが、ブルジョワ的なものへの憧れは多くの人々が一度は持つものだった。ナチスのイデオロギーの良し悪しに関係なく、ブルジョワ的世界を体験することでき、生活への負担をかけることなく、自分たちの日常にそのような要素を取り入れることができるという魅力は、当時の子どもたちからすれば、夢の世界のように映ったのではないだろうか。

②「若さ」の魅力

二つめの魅力は「若さ」という点である。シーラッハの掲げた「青少年による青少年の指導」というスローガンは、それ以前の伝統的な青年運動も掲げた理念ではあったのだが、ワイマール期青年運動の指導者の多くは高齢化の一途をたどり、中には50歳を過ぎた者が率いているのが現状であった。

それに対し、ヒトラー・ユーゲントは、ナチ党の理念そのままに、「若さ」を前面に押し出し、若者たちの成長の妨げとなる老いた指導者たちが率いる既存の青年団体を激しく非難した。こういったヒト

ラー・ユーゲントの行動は、年配の指導者たちにうんざりしていた青年たちにとって、ヒトラー・ユーゲントが大きな魅力を持った団体に映った大きな要因に違いない。加えて、ヒトラー・ユーゲントに所属した者は、一定の年齢を超えると突撃隊や親衛隊などのナチ党内の組織に移ることもできたため、将来を考える若者にとっても大きな魅力となった。

実際に、ヒトラー・ユーゲントの大隊指導者の平均年齢は25歳以下、管区指導者の場合は30歳以下であった。小隊や中隊のリーダーは、指導される若者たちよりも１、２歳年上でおよそ15～18歳だったということから、既存の青年団体の指導者よりどれほど若かったかということが窺えるだろう。ナチス期においては、15～18歳の青少年に対して、40～160人（小隊・中隊レベル）の若者に命令できる権利が与えられただけではなく、ナチスという国家権力をバックに両親・学校・教会などの権威に対抗できる「権力」を若いうちから掌握することのできる環境が整えられていたのである。[17]

③父親や教師の権威への反抗

三つめの魅力は、この組織がドイツに伝統的に存在していた父親、教師などの権威から若者が脱却するのを手助けしてくれたという点である。当時、ドイツの一般家庭ではまだ父親の権威が非常に強く、子どもたちをその権威で押さえつけていた。子どもが親に反抗する時期というのは現代でもよくある話ではあるが、その暴力さえともなう押さえつけ方や親の権威が当時はもっと大きなものであったと考えてもらえればよい。これら父親の権威主義的態度に反感を抱く子供たちのバック・アップとなったのが、ヒトラー・ユーゲントであった。

以下は、ルール地方のある鉱山労働者の回想である。

> 「ある日、僕は父さんのところに行って、「父さん、僕はヒトラー・ユーゲントに入るよ」と言ったんだ。父さんは社会民主党員だった。だから父さんは、「ヒトラー・ユーゲントに入るんなら、もうお前にすねをかじらせないからな」と言った。こんなことを言っただけで、多くの父親たちが強制収容所に放り込まれた。子どもたちには、別に、父親を密告する気なんかなく、聞かれたから答えただけなんだ。「お前はどうしてヒトラー・ユーゲントに入らないんだ」、「父さんが駄目だって言うんです」と」[18]

同じように、ヒトラー・ユーゲント団員たちは学校・教会権力への反抗も強めていった。ここに特記しておくべき点は、先にも触れた学校教育の問題である。若者のヒトラー・ユーゲントでの活動が増え、さらに彼らの権威に対する反抗心が育っていくのと比例するように、教師の権威が低下したことが大きい。それまでの教師というのは、家庭内の父親と同じく強い権威を持ち、当時は体罰も公然と認められていた。しかし、こういった「詰め込み教師」をシーラッハやヒトラー・ユーゲントの幹部たちが批判をし[19]、その声に後押しされるかのように子どもたちも反抗していく構図が出来上がる中で、気づいた時には生徒が反ヒトラーの考えを持つ教師の監視役になるといった逆転現象すら生じていた。実際のところ、ヒトラー・ユーゲント団員たちは教師に対する異議申し立てをすることが可能であり、教師の権威に対する「対抗権威」を同時に持つことができた[20]。団員たちはナチ党という国家の後ろ盾を受けながら、それまでの自分たちを押さえつけていた権威を逆に抑えつけることが出来るという魅力にとりつかれたのである。

④男女対等という魅力

ナチスが政権を獲得する以前、ヒトラー・ユーゲントの女子たちに求められたものは、慈善的活動、突

撃隊員のための食事の用意、下着のつくろいといった、日常生活で要求されるものと変わらない補助的な仕事[21]であったが、ナチス期には、活動の内容が男子とさほど変わらないものへと変化していく。もっとも、ナチ・イデオロギーでは、男子は将来の兵士、女子は将来の母を目指すことが求められており、男女はその役割が明確に区別され、女性の第一の使命は国家と国民のために子どもを産むことであると規定されている。このことから、ドイツ女子青年団においても将来の母に向けた教育を行っていたと考えられがちだが、実際にヒトラー・ユーゲント幹部の観点は違っていた。シーラッハはこう述べている。

「男子はすべて男になろうとし、女子はすべて母になろうとするが、なによりも今は、女子はドイツ女子青年団に、男子はヒトラー・ユーゲントにいるのであり、ともに独自の青年期を送っているのである。・・・　われわれは、将来の母の組織ではなく、女子の組織である。」[22]

シーラッハは男女の区別よりも、「青少年」としての男女の共通性を強調していることがわかる。

実際のヒトラー・ユーゲントの教育や活動に関しても、男女の間にはほとんど差がなかった。女子教育においても男子の場合と同じく、活動の3分の1は世界観教育、残りの３分の２は肉体鍛錬の時間に充てられており、ヒトラー・ユーゲントの女子たちにとって、これらは「女性の解放」という大きな魅力に映ったのである。

⑤制服の魅力

これまでいくつか魅力を上げてきたが、私たちが一番身近に考えられる魅力はこの制服ではないだろうか。知らず知らずのうちに「大人が着るかっこいいもの」への憧れや、コスプレ趣向の視点から、軍服や制服に憧れを抱く人は今でも多いはずだ。当時の子どもたちも例外ではなく、ヒトラー・ユーゲントの制服に憧れ、入隊する子供も少なくはなかった。

図4：1933年5月、ヒトラーユーゲントの団員たち
「ヒトラーユーゲント」『フリー百科事典　ウィキペディア日本語版』2011年12月4日 (日) 08:48
UTC、URL: http://ja.wikipedia.org

図5：1935年ケルレ村での卒業写真。女子は女子青年団、男子はヒトラー・ユーゲントの制服
（山本秀行『ナチズムの記憶』171頁）

基本的に、少年団は褐色のブラウス、夏規定ではズボンの丈は手の幅だけ膝に来るようにし（図４）、ハイソックス、靴はしっかりしたもの、髪は短髪で左に分けるという規定があり、ドイツ女子青年団の場合は黒いスカートに青いブラウスという規定があった（図５）。実はこれらは突撃隊や親衛隊にならった格好であり、制服や髪形などはすべて大人に準じたものであったため、大人になったような気分になれる[23]、また特別な存在であるという優越感が大いに感じられるものであったことが、若者たちが制服に魅力を感じた大きな理由だろう。

若者のヒトラー・ユーゲントへの入団は、憧れの象徴を身にまとうことができ、しかもその象徴を盾に権力を行使できるという魅力があったからこそであった。ナチスの理念を差し引いても、なおも光を放つことのできる魅力があったということ、そして、ヒトラー・ユーゲントがそれらの魅力を巧みに利用したことが、このヒトラー・ユーゲントが青少年を独占し、国家組織として成り立つに至った要因であるといえるだろう。

2. 目撃者の目

これまでは、実際に体験した人たちから見たヒトラー・ユーゲントの魅力を追ったが、外から見ていた人たちにとって、ヒトラー・ユーゲントはどう映ったのか。

ドイツと日本は1936年に締結された日独防共協定に伴い、双方の協力強化をはかるべく、青少年相互訪問の一環として、「日独青少年団交歓事業」計画を進めた。1938年6月に日本の訪独青少年団がドイツを訪問、7月にはヒトラー・ユーゲントが来日する機会が設けられた。その時、日本の青年たちの多くは、自分たちとヒトラー・ユーゲントとの違いをまざまざと見せつけられ、ギャップに驚きつつも、尊敬と羨望の眼差しで見ていたことが記述として残っている。そこで、当時の様子をまとめた中道寿一の著書『君はヒトラー・ユーゲントを見たか？』の中で、外部から見たヒトラー・ユーゲントの魅力はどんなも

のであり、どんな風に感じられたのか、改めて魅力という観点からまとめてみた。

（1） 日本の青少年団代表が受けたドイツでの感動

日本の青年団の代表としてドイツを旅した30人の若者たちが得たものは、「ヒットラー・ユーゲントが特に力を入れている体育にしろ、あるいはヒットラー総統に対する忠誠心の涵養にしろ、とにかく彼ら青少年に対する指導訓練は、同時に軍隊の基礎訓練とも言えるのであって、これというのも結局は現ドイツの各般の運営が、直接間接をとわず国防の一点に集中していることを雄弁に物語っている」ということであった[24]。派遣団員たちがヒトラー・ユーゲントからヒントを得た、日本の青少年団運動への「示唆」や「教訓」を見ると、体格、制服、施設、指導者、PRの点などが個々人によって様々挙げられているが、共通するものとして、第一に、青少年団運動の統一・組織化が挙げられている。

> 「我が国の青少年団運動は青年団にしても少年団にしても・・・非常に組織の全国的統制が弱い。・・・また組織内部の統制も弱く、下部組織の幹部の権威、統制力がないということは日本青少年団の大きな弱点ではないか。・・・自由主義の洗礼によって、この統制が弱められ、現在に至った。」（団員N）[25]

多くの日本の青少年団員がこうした証言を残しているが、組織の統一性やその一体感、統制の強さについて感銘を受けたことが分かるだろう。また、青年団員たちが、青年団体統一の必要性、とりわけ勅令団体として青年団を一元的に国家の指導の元におくべきとする意見を持ち、このように報告がなされたことは、政府・青少年団指導者たちの意図していたことであった[26]ともいえる。

もうひとつ、ドイツを訪れた青年団員たちがもっとも感動した出来事が、ニュルンベルク・ナチス党大会への参加であった。このとき受けた興奮と感動も、団員全員に共通する出来事として記録に残っている。以下は、ある代表団員の党大会第五日目の記録である。

> 「第五日目（９月10日）HJ（ヒトラー・ユーゲントの頭文字。以下同様）の日。今日は我々にもヒットラー総統の視謁があることとて一層緊張して出かけた。ツェッペリーン広場の裏の競技場に着いて見ると、集まったHJの大群はもう既に場内を埋めつくしていた。『ハイル』『ハイル』の声で我等は場内に迎えられたスポーツ場の一角に頑張って時が来るのを待っていた。やがてシーラッハ指導総監が出て来て、『私の同志よ』と呼びかければ、HJは『私の指導者よ』と呼び返した。次に総統が出てきた。『ジーク・ハイル』『ジーク・ハイル』の声はいやが上にも場内のHJを沸き立たせずにはおかぬ。・・・総統は一々見回って各団体の指導者の報告を聞いていた。・・・総統は女子の十種競技の優勝者に対して一人一人親しく握手した。彼女らは無上の光栄に只々感激して泣いていた。いよいよ我々の前に歩を運ばれた総統はシーラッハ総監の説明にうなずかれ『ヤーパン』『ヤーパン』と連呼されながら微笑をもって、我等の目迎、目送裡に、前を通過され、団長および参与と固い握手をされた。全部視謁し終わったヒトラー総統は、最後に自動車で一周した。実にその時の人気たるや、実に筆舌にも尽し難く、『ハイル』『ハイル』の声は天地を圧し、ドイツ国の将来を寿ぐ万歳とも思えた。夜はHJのラーガーに招待せられて、シーラッハ総監、ルドルフ・ヘス幹事長に引見されるの光栄を有した。」[27]

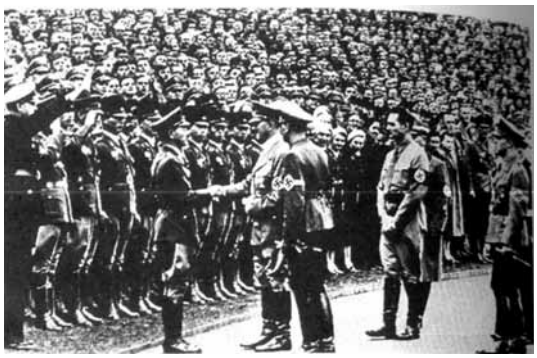

図６：９月10日、ニュルンベルク大会ヒトラー・ユーゲントの日のヒトラーと日本の青年派遣団
（中道寿一『君はヒトラー・ユーゲントを見たか？』南窓社、1999年、69頁）

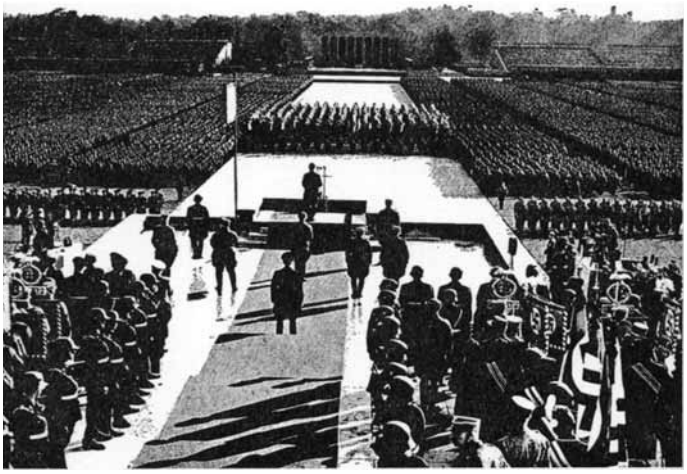

図７：ニュルンベルク党大会突撃隊の日
（中道『君はヒトラー・ユーゲントを見たか？』70頁）

こうした証言から、ドイツに渡った青少年団員たちの目には、ヒトラー・ユーゲントは、非常に統一性があり、強い信念を持った国家の組織という、魅力を持った組織に映っていたことがわかる。

(2) ヒトラー・ユーゲントの来日

時を同じくして、ヒトラー・ユーゲントの代表団が来日した。その時の人々の印象はどうだったのか。

1938年8月16日午後0時半、横浜に降り立ったヒトラー・ユーゲント派遣団30名を、数千の歓迎陣、

そして青年団代表200名と数十の団旗、横浜連合青年団のブラスバンドが迎え入れた（図８、図９）。

図８：８月17日、交歓式におけるヒトラー・ユーゲント派遣団
（中道『君はヒトラー・ユーゲントを見たか？』101頁）

図９：８月17日、交歓式におけるヒトラー・ユーゲント派遣団の団長と副団長
（中道『君はヒトラー・ユーゲントを見たか？』102頁）

この日、ヒトラー・ユーゲントを迎えた大日本連合青年団常任理事の栗原美能留は、ヒトラー・ユーゲントを見て、歯がゆい想いにかられたという。それは、自分たちの青年団とヒトラー・ユーゲントを比べてというだけではなく、「ヒットラー・ユーゲントの青年たちが、さも見事な統制の下に、溌剌として、彼らあこがれの我らの国を訪れた所以のものを考え、これを迎える我らの状態が余りにも雑然とし、しかも気迫のないのを目撃した」からであった[28]。ヒトラー・ユーゲントと自分たちを照らし合わせ、自分たちは何を目指せばよいのか。ヒトラー・ユーゲントという自分たちによく似た団体の素晴らしさを目の当

たりにすることで、自分たちがいかに未熟であったかを思い知らされたようにもとれるが、目指すべきものを見つけたことで、その目的を明らかにしたようにも感じられる。また、ヒトラー・ユーゲントの美しさについて、『大日本青少年団史』は、次のように記録している。

> 「彼等ヒトラー・ユーゲントの夏季服装は美しかった。幹部は軍帽式、団員は戦場用の略帽をいきに頭にのせ、淡褐色の上衣に白の襷がけのベルトをきりっと結び、腰には短刀（幹部は短剣）をつるし、団員は半ずぼんに白の靴下、幹部は乗馬ずぼんに長靴。左腕に赤で染め抜いたハーケンクロイツの腕章を付けていた。胸にはそれぞれの功績を表すバッジ。褐色のワイシャツに黒のネクタイ。これが青年団なのか。出迎えたわが青年たちは驚きと称賛との嘆声を発した。彼等の行動はてきぱきし、双方の踵をかちっと合わせて片手を挙げてハイル・ヒトラーと叫ぶ挨拶もわが青年団員たちにははじめてのことだった。彼等の行動は全く一糸乱れず、あたかも矩形の箱がそのまま進むごとく、きちっとして、だらだらに延びもしなければ縮みもしない。その機械的な美しい行進は青年団員の眼を奪ったし、すべての日本人を魅了するに十分であった。」[29]

総じて、制服やユニフォームの見栄えのよさ、乱れることのない団体行動に見られる統制の取れた組織力に、日本人は魅了されたことがわかる。加えて、体軀がよく、声が良く通り、明朗活発で、役割分担がよくできているのに感心した[30]という証言も残っている。

3. 魅力の代償

以上、体験者と目撃者という両者の目線からナチスの魅力を分析をしてきたが、共通するところは、ナチズムを全面的に押し出すような魅力ではなく、思春期を迎える子どもがごく普通に魅力だと感じるものだったということがわかった。それらの魅力を、ヒトラー・ユーゲントが上手に提供していたに過ぎない。ヒトラー・ユーゲントの魅力というよりは、組織がその魅力を人集めに利用しただけのようにも感じられる。子どもたちはナチスのイデオロギーが魅力的だから魅かれた、ということではないことは明白であり、子どもたちは目の前にある魅力にただひかれ、知らず知らずのうちにナチス教育を施されていってしまった。結果論ではあるが、純粋なうちから悪を善のように刷り込まれるようなものである。結果として、青少年を掌握すること、そしてナチ的人間を育成することが目標であった、ヒトラー・ユーゲントの狙い通りに事が進んでいった。

しかし、その「魅力」も現実の中で薄れていくこととなる。ヒトラー・ユーゲントが官僚的な大組織として確立されるのにともなって、1930年代にその指導部の年齢がしだいに高くなり、その結果、若者を引きつける力が弱くなっていった。また、すべての青少年を組織するという主張によって、ヒトラー・ユーゲントへの反感を不参加という形で表していた者までが、団の中に取り込まれるようになっていった。ユーゲントの勤務義務を強制するためにとられた規律化と監視措置によって、仲よしグループや徒党の無邪気な日々の娯楽までもが犯罪的であるとみなされるようになっていくのである。これに加えてヒトラー・ユーゲントは、大戦が勃発する前からすでに、入営前の軍事訓練という方向をますます強めるようになっていったため、ユーゲントでの活動を楽しみよりも苦痛と考える若者が、ヒトラー・ユーゲント内でも増えていった[31]。安易な魅力でひきつけられた若者たちは、強制的にナチスの道具として利用されていくことに気づくのである。

このように、1930年代の後半には、ヒトラー・ユーゲントの危機が次第に高まっていく。これらの動きは、大戦中の青少年の徒党による激しい抵抗運動へ発展していった。当初の好感から一転、組織への拒

絶感が少なからず青少年の中で見られるようになっていくのである。ヒトラー・ユーゲントが国家の権威をふりまわせばふりまわすほど、また青少年を完全に組織化しようとすればするほど、ヒトラー・ユーゲントに背をむける若者たちの行動様式がますます鮮明な姿をとっていった。1930年代の末には何千という青少年が、ヒトラー・ユーゲントの余暇活動に背を向けるようになったという。彼らは、自分たちでグループを作り、ナチスにしばられることなく自分たちのやり方で余暇をすごすようになった。それどころか彼らは、ヒトラー・ユーゲントのパトロール隊やゲシュタポからますます強力な圧力がかかるようになってさえも、自律的な空間を守ろうとしたのである。こうしたナチスの「反抗者」については次章でくわしく見ていこうと思う。

厳しい戦局の中で、ヒトラー・ユーゲントはどう変化していくのか。夢と現実との間で団員たちは何を思い、行動するのか。そして、ヒトラー・ユーゲントの持つ魅力に囚われず、反抗した者たちのことについて、これら両者を比較しつつ、戦後に結果として両者にどういった結果をもたらしたのかについて次の章で述べていきたい。

第三章　夢と現実とのギャップ、そして反抗者たち

1. 戦前と戦中のギャップ

戦争が始まると、ヒトラー・ユーゲントの活動はさらに多様化し、拡大していった。時期的に一番盛んであった農業活動に一番多くの人員が割かれ、党活動ではナチスの伝令や守衛を任された。また、国家や地方自治体のための活動や国防軍のための活動、住民への食料や石炭の配給を保証するための活動や街頭募金・工作・衣類の収集等を行う冬季救済事業、廃品回収、薬草や野生の果物などの収穫、社会奉仕活動、文化的活動、東部占領地域での動員などがあり、これだけ見ても動員の多様性と規模、強制力は戦前とは比べ物にならないものであるということがわかるだろう。

戦時下では特に、女性の社会進出が目覚ましかった。ヒトラー・ユーゲントは平時から指導者不足に悩まされていたが、男子指導者の多くが国防軍に召集されることによってより危機的状況に陥った。そこで、この穴を埋めるためにドイツ女子青年団の指導者が投入されたのである。この時期に多くの女子がヒトラー・ユーゲントの官僚機構に進出していった。また、東部占領地域への動員も女子に新たな職業への可能性を生み出していく。親衛隊によって立ち退きを強制されたポーランド人住民の住居をきれいに片づけ、民族ドイツ人[32]の移住者が引っ越してこられるよう準備し、また彼らが土地になじめるよう手助けをした。それらに加え、午前は小さな子どもたち、午後は職業学校の生徒にドイツ語の授業を行い、夜は政治啓蒙活動、音楽会や演劇などの催し、農民女性に家政や育児、園芸やインテリアについてのアドバイスなど行うなど、大変で過酷なものであった。もっとも、こうした活動により、女子に教員など、自立職業人への道が開かれるといった面もあった。

戦局が進むにつれて、ヒトラー・ユーゲントはついに戦闘員として動員されていくことになった。数ある配置場所の中で、まずは空軍補助員への動員がなされた。はじめに動員されたのは1926年と27年生まれの中等学校の生徒（当時15～16歳）で、その年齢や配置される場所の範囲もだんだんと拡大していった。また、戦争での動員を喜ぶ生徒の方がはるかに多く、戦争は面白かった、誇りに思う、うれしいと思うなどと言う者が多かったというのは興味深い結果であった。そして、この間にヒトラー・ユーゲント団員を戦闘に動員しようとする動きは加速していくのである[33]。

軍事教練も強化され、1944年ごろに戦前から行われてきたヒトラー・ユーゲントの通常の活動はほと

んど行われることがなくなった。また、1944年９月、ヒトラーは16～60歳までの男性は国民突撃隊を結成するよう命令、ヒムラーは1928年と29年生まれの男子がこの国民突撃隊の中で特別部隊を結成するよう指令を出した。戦争が佳境となる中、女子も戦闘員として動員されようになり、通信補助員として海軍、高射砲部隊にも動員されていった[34]。

戦時中は、子供たちを戦闘に駆り出すための戦時プロパガンダも積極的に行われた。そのためスローガンで訴えることが積極的に行われていくのだが、それらを見るとヒトラー・ユーゲントの活動内容が、「銃後の戦線」を支えるための活動から実際の戦闘への動員へと変わっていくことがくっきりと示されている。

また、ナチ的考え方を青少年に叩き込み、戦争に志願させようとする取り組みもこれまで以上に積極的に行われ、プロパガンダの装置としては「すらすら読める新聞や雑誌」「具体的な体験をちりばめた映画」、ラジオなどが利用された。こうした様々な「道具」を駆使して、団員たちへ戦争に自発的に志願するよう訴えかけたのである。戦争が終盤に差し掛かる1945年３月26日の「ヒトラー・ユーゲントの義務の日」と呼ばれる集会ではさらに呼びかけが続けられ、戦局の打開が見いだせない最悪の状況にあっても、青少年を「憎むべき敵」との戦闘へと、そして無意味な死へと駆り立て続けたのである。

こうして、第二次世界大戦の戦況の変化によって、ヒトラー・ユーゲントの若者たちはよりナチスに利用される形で、体験の場をそれまでの日常世界から戦争という非日常的な世界へと移していったのである。あるものはナチスに忠誠を、あるものはわずかながらの疑念を抱きつつも、ヒトラー・ユーゲントの組織の中に取り込まれ、戦争の道具として扱われていった。

では次に、これらの若者たちとは逆の、ヒトラー・ユーゲントには真っ向から反抗的態度を取っていた若者たちはどういった状況下におかれていたのかを見ていきたい。ナチスという強大な権力を前に堂々と反旗を翻した若者たちは、ナチスから見れば不良集団であるという認識と同時に、ナチスの秩序を乱す非常に危険な集団として見られていた。綺麗事では片づけることのできない存在である「反抗者」たちについて次で詳しく見て行こう。

２．反抗者たち

ヒトラー・ユーゲント外の青年たちの動きは戦争以前からあったことであるが、彼らを特に「逸脱した者たち」という認識でナチスが抑圧を強めていくのは、1936年ごろからのことであった。当時のヒトラー・ユーゲントでは、肉体的鍛錬の時間が軍事教練に割かれることが多くなり、より軍事的な色を強めるようになったころである。このころはまだ嫌気がさせばやめることのできた時代であったが、1939年３月25日に出された「ヒトラー・ユーゲント法第二施行条例（青少年奉仕令)」によって、ヒトラー・ユーゲントへの入団がついに義務化されることとなった。その結果、入団を拒否すれば罰則が科せられることとなり、また同時期に組織された「パトロール隊」によって、ヒトラー・ユーゲント外で行動している青年の監視、「不良」と呼ばれる若者たちの取り締まりも行われるようになった。さらに、ヒトラー・ユーゲント内でも活動をおろそかにする団員に対する取り締まりが強化された。結果的にドイツ青少年がパトロール隊の監視の対象となり、ナチスの統制がますます強まっていったことがわかる。

だが、こうした規制と反比例するかのように、ヒトラー・ユーゲント外の若者たちの「逸脱」した行動が目立つようになる。その若者たちは、それは、従来ナチスが目の敵にしていた「同盟」青年やカトリック系青少年団体とは別の新しい青少年の集団である。ヒトラー・ユーゲントは、このような新しい青少年集団を非常に危険な存在と考えていた。そこで、代表的な三つのグループについて、以下にまとめてみた。[35]

a) スウィング青年

（行動拠点）ハンブルク中心

大都市の裕福なブルジョワ層の子弟からなる、バンドを作ったりダンス・パーティーを開いて楽しんでいるグループ。ジャズやスウィングを好んだためこう呼ばれる。

若者たちは「ハイル・ヒトラー」の代わりに「ハイル・スウィング」を使った[36]。

ヒトラー・ユーゲントに対しては、拒否というより放っておいてくれというだけ。

b) エーデルワイス海賊

（行動拠点）ルール地方

ケルン、デュッセルドルフ、エッセン、ドゥースブルクなど「同盟青年的徒党の牙城」と呼ばれた。

労働者中心。同盟青年の行動スタイルが継承されている。

ヒトラー・ユーゲントの拒否。しばしばヒトラー・ユーゲントへの襲撃を加えた。

c) モイテン

（行動拠点）ライプツィヒ

上記のエーデルワイス海賊とよく似ている（同盟青年の行動スタイルを継承、労働者中心、ヒトラー・ユーゲントを挑発し、対立していたこと）。違う点は、共産党の労働運動の伝統が流れ込んでいることで、これはライプツィヒがルール地方に比べて共産党の伝統が根付いたものだからと言われている。

三者はそれぞれ特徴があり、構成員の育ってきた社会的環境も異なっていたが、ヒトラー・ユーゲントに入りたくないという思い、それよりも、誰にも指図されることもなく気の合った仲間と余暇を楽しみたいという願望では共通していた[37]。そのため、彼らの行動が、ナチズム体制そのものへの批判であったかという点には少々疑問が残るところである。

ヒトラー・ユーゲントが国家の組織として強制力を持ち、独占的支配を強めていく頃、反抗的なグループもまたヒトラー・ユーゲントに対してより攻撃的になっていった。特に、モイテンとエーデルワイス海賊の二つによるヒトラー・ユーゲント団員やパトロール隊への襲撃は日常茶飯事となり、治安や秩序が荒れていく状況に、ナチスは困惑する。この状況を変えるべく罰則が強化されたが、結果はさらなる反抗を生み出すだけであった。その後も罰則は強化され、のちに逮捕者もでたほか、一番重い刑罰では強制収容所送りにされた者たちもいたが、それでも反抗を抑えきることはできなかった。

全体的に見れば、このような反抗する若者たちからは、ナチスが政権を掌握する以前の青年運動に参加した若者たちのような、自由気ままに生きたいという願望が見えてくる。抑圧された世界の中で与えられる権力やわずかな自由よりも、自ら考え、行動し、自由を求めることをいとわない心意気が見受けられる。

また、ヒトラー・ユーゲント自身が若者の「逸脱」行動を増加させたという見方もできるだろう。ヒトラー・ユーゲントは青少年を独占し、彼らに対する統制の強化、統制を免れようとする者はけっして許さないという強硬な態度を徹底的に取った、ナチ体制下だからこそ、若者たちの「逸脱」行動が増加した[38]というのは間違いないと思う。

反抗者の面から見れば、ヒトラー・ユーゲントは青少年を完全に独占したとは言えず、教育は不完全だったのかもしれない。だが、こういった反抗者たちを裏舞台の立役者とすれば、表で銃後を支えた、ナチスに献身的な若者たちを育て上げたという実績を否定することはできないだろう。ナチスとヒトラー・

ユーゲントの魅力と幻想に囚われ、戦後を迎えることになった若者たちの心はどう変化したのだろうか。それは、目覚めという名の絶望、辛い現実との対面から始まるものであった。

3. 戦後目が覚めた人たち

自身の実体験を基に第二次世界大戦のありさまを描いた、ハンス・ペーター・リヒターの自伝的小説『ぼくたちもそこにいた』、『若い兵士のころ』の冒頭に、それぞれこんな一文が書かれている。

「わたしは参加していた。単なる目撃者ではなかった。
　わたしは信じていた。――わたしは、もう二度と信じないだろう。」[39]

「戦争がはじまったとき、わたしは十四歳だった。
終わったとき、二十歳だった。
三年間、わたしは軍人だった。
わたしが見たこと、したことは、
正当なことだと思っていた。なぜなら、
はっきりと異議を唱えるものは、一人もいなかったから。」[40]

これは、リヒター自身の体験をふまえての正直な言葉だと思われる。ここから、リヒターの戦中と戦後での心理状況が全く異なるものになっていることがわかる。そして、自分は加害者であったという反省の念とともに、戦中はそれらが正当化されていたこと、組織の中でナチスに対して異論を言うものはいなかったこと、大人でさえも異議を唱えることがなかったということが読み取れる。もちろん、この時期にナチスに対して異議を唱えるということに大きなリスクが伴ったことは言うまでもない。リヒターのように、ヒトラー・ユーゲントを経験し、後に批判的な著作を書いている作家や、著名人は多い。中でも、ヒトラー・ユーゲントの下部組織において、壮絶な経験をした歴史家ハンス＝ウルリヒ・ヴェーラーは、その経験からナチズムに対し、どのような状況であれ好意的であったり、肯定的な態度を取りえないのだという[41]。

ヒトラー・ユーゲントが目指した青少年の掌握とナチ的人間を育てるという目標は表向きは実現したのかもしれない。しかし、それはあくまで組織内での話である。彼らの目指した未来は、ナチスなしには存在しない。ヒトラー・ユーゲントに身をゆだねた若者たちの多くが、一時の喜びと引き換えに思春期に楽しむべきものを失い、戦後は目に見えない罪を背負う結果となった。それが、ナチスやヒトラー・ユーゲントのせいと一言では片付けられないところにこの問題の深さは存在する。一瞬でも、彼らは加害者となってしまったからだ。

ヒトラーの死後、ヒトラー・ユーゲントの団員たちは、さまざまな形でナチスの本来の姿をようやく目の当たりにする。自分たちが信じ守り続けたものがいかに残虐で恐ろしいものであったか、そして、自分たちもそれらの残虐な行為に手を染めてしまっていたということを知ってしまった時のショックは、計り知れないものだっただろう。強制収容所の実状や貨物車両いっぱいに詰められた死体の山、死体を焼くための火葬用の炉など、これらを初めて目撃したヒトラー・ユーゲントの少年は、その日は眠れず、「目にしたものの衝撃があまりにも大きくて、その事実を受け入れることができませんでした。涙が止まりませんでした」[42]と回想している。彼らがナチスの真実と対面し、きちんと向き合えるようになるのは、何年もたってからのことであったという。大量虐殺の首謀者たちに仕え、実際に手を貸して加害者となってし

まったことは間違いない事実なのである。

1945年５月８日にドイツが無条件降伏をした後のニュルンベルク裁判では、ヒトラー・ユーゲントの指導者であったシーラッハを筆頭に、指導者たちが裁判にかけられた。しかし、ヒトラー・ユーゲントの団員たちがニュルンベルク裁判にかけられることはなかった[43]。その理由として、国際法廷は次のように結論している。

> 「第三帝国の子どもや十代の若者は、権力を得るために利用されたのであり、彼らを利用した党と政府によって裏切られ、見棄てられ、犠牲にされたのだ」[44]

戦後すぐでは、まだ真実を受け止められず、ナチスの信念と自分の行ったことを正当化する者もいた。だが、彼らもまた罪の意識が芽生え、長い年月をかけて真実と向き合っていくこととなる。

戦後のドイツでは、連合軍司令官であったアイゼンハワーを中心に、ドイツ国民の再教育が必要と考えていた。また、若者たちがドイツの未来を担う力であることを認識していたため、まずは教員の再教育をし、生徒たちの批判的思考力を促進させるとともに、自分自身で考えることの大切さを教えるよう求めていった[45]。

失われたものは多く、あまりに大きい。ナチスが犯したもの、自分たちが犯した罪を完全に消し去ることは不可能だ。だが、それらの罪を認めた上で、ドイツ国民、元ヒトラー・ユーゲント団員たちは、新たなドイツを築き上げることを選んだ。いずれにせよ、ヒトラー・ユーゲントでの経験が、彼らの人生に大きく影響したことは言うまでもない。

おわりに

ヒトラー・ユーゲントは唯一の青少年機関を目指し、男女青少年の組織的独占という目標は果たされた。ヒトラー・ユーゲントの教育の成果はとりわけ戦争の末期で発揮され、ナチ党が求めた「新しい人間」「ナチ的人間」の育成という分野でも成功したといえるのかもしれない。しかし、ドイツ全土がナチに染まり、青少年がヒトラー・ユーゲントに染まっていく中で、反抗する者やよく思わない者たちが少なからず存在していたということを忘れてはならない。また、入団した者たちも、ナチスによって完全に洗脳されたわけではなく、ナチスのイデオロギーを受け入れていたわけでないということも重要な点であろう。だが、どちらにせよ子供たちが時代に翻弄されたことはゆるぎない事実なのである。

ナチスやヒトラーの時代と聞くと、「自由の許されない世界で、非常に独裁的かつ強制的にナチスを叩きこまれる」というイメージを思い浮かべるのではないだろうか。しかし、実際私たちに一番近い一般人の目から見てみると、実は「ナチスの時代はよかった」と感じていた人々が多くいたということを私はゼミを通して知った。この点については、ナチスが絶対的権力を持つために、本来の事実を伝えず、国民の目を背けさせていたという見方もできなくはない。だが、民衆のレベルから見れば、ナチスは国民の欲するものをそのまま与えてくれる魅力を持った存在であったことは間違いないだろう。ここではナチズムを信仰するか、否定するかは抜きに考えてもらいたいと思う。

今回、それらをふまえて、若者たちはどうだったのか、という視点から考察したが、やはり、子どもたちも同じく、ナチズムが持つ「魅力」というよりは、ヒトラー・ユーゲントが与えてくれるものにひきつけられていったということが分かった。いわゆる「反抗期」を迎えた子どもたちが目指したものは、親や

教師たちのいない世界、自分たちの求めるものを提供してくれる夢のような世界、それがヒトラー・ユーゲントだった。善と悪の区別も分からないうちにナチズムの世界観を植え付けられ、目が覚めた時にはすでに遅い、ということも少なくなかっただろう。ヒトラー・ユーゲントへの入隊が義務化され、強制力が働くようになればなるほど、恐ろしさに気付いていった子どもたちもいただろうし、気づかなかった子、様々だとは思うが、ナチスに翻弄されたということに変わりはない。

逆に、魅力にとらわれることなく反抗した若者たちは、一見すれば不良集団にも思えるが、彼らが異議を唱え、自ら考え行動するということを十分理解していたことは大きい。自主性が禁じられていた時代に、自主性を重んじ、行動を起こした若者たちがいたことは、戦後のドイツの教育にとって、よい模範となった例もあったのだという。危険を顧みず、外から行動を起こすことの重要性を認識させてくれた。

最後に、私の感想と個人的な意見として述べておきたいことは、ここでの「魅力」は決して現代で考えられないことではないということだ。こういった魅力を前にして、私たちはどんなことを考えて行動できるのか。正しいものと、正しくないものの判断ができるのだろうか。もし、この時代のドイツに自分がいたとしたら、どんな風に過ごすのだろうか。論じていて感じたのは、こういった自分自身への問いかけの数々だった。

歴史は過去のものであり、変えることはできない。だが、その歴史を踏まえて、考えさせられることや、教訓にしなければならないことが山ほどある。それはどの歴史でも同じことだ。今回のヒトラー・ユーゲントの魅力を通じて、私が自分自身に問いかけをしたように、「もしも」を念頭に置きながらぜひ考えてもらいたいと思っている。

【参考文献】

・上山安敏　『世紀末ドイツの若者』1986年、三省堂。
・ハンス＝ウルリヒ・ヴェーラー『ドイツ帝国 1871-1918年』大野英二・肥前榮一訳、1983年、未来社。
・木谷勤・望田幸男『ドイツ近代史―18世紀から現代まで』ミネルヴァ書房、1992年。
・ギュンター・グラス『玉ねぎの皮をむきながら』依岡隆児訳、2008年、綜合社。
・田村栄子　『若き教養市民層とナチズム　－ドイツ青年・学生運動の思想の社会史－』1996年、名古屋大学出版会。
・中道寿一『君はヒトラー・ユーゲントを見たか？』　1999年、南窓社。
・スーザン・キャンベル・バートレッティ『ヒトラー・ユーゲントの若者たち』あすなろ書房、2010年。
・原田一美　『ナチ独裁下の子どもたち　ヒトラー・ユーゲント体制』　1999年、講談社。
・平井正『ヒトラー・ユーゲント　青年運動から戦闘組織へ』中央公論新社、2001年。
・デートレフ・ポイカート著、木村靖二・山本秀行訳『ナチス・ドイツ―ある近代の社会史』　1991年、三元社。
・エーリカ・マン著、田代尚弘訳　『ナチズム下の子どもたち　家庭と学校の崩壊』　1998年、法政大学出版局。
・山本秀行　『ナチズムの記憶　日常生活から見た第三帝国』　1995年、山川出版社。
・ウォルター・ラカー著、西村稔訳　『ドイツ青年運動　ワンダーフォーゲルからナチズムへ』　1985年、人文書院。
・ハンス・ペーター・リヒター著、上田真而子訳。
　『ぼくたちもそこにいた』『若い兵士のころ』　1995年、岩波書店。

1　ナチスとは、ドイツで1919年に誕生した国民社会主義ドイツ労働者党（Nationalsozialistische Deutsche Arbeiterpartei）の略称である。本稿はこの政党を「ナチス」、ヒトラー率いるナチスが政権にあった時代を「ナチス時代」と記す。
2　ワイマール共和国末期の時点で、ナチスは共産党を除いて党員の平均年齢がもっとも低く、政権掌握時の時点では30代前半であった。（木谷勤・望田幸男編著『ドイツ近代史―18世紀から現代まで』ミネルヴァ書房、1992年、172頁）
3　1770年代のドイツの文学運動。啓蒙的合理主義と同様に人間解放を目標とするが、機械的合理主義に反発し、自由や個性を尊重し、それを束縛するものに反抗を試みた。（京大西洋史辞典編纂会編『新編 西洋史辞典』、1983年、東京創元社）
4　解放戦争後、ドイツの大学生が結成し、三月革命期における「自由と統一」の運動で先駆的役割を果した団体。（京大西洋史辞典編纂会編『新編 西洋史辞典』）
5　ウォルター・Z・ラカー『ドイツ青年運動　ワンダーフォーゲルからナチズムへ』西村稔訳、人文書院、1985年、14-15頁。
6　ラカー『ドイツ青年運動』19頁。
7　ラカー『ドイツ青年運動』33-36頁。
8　ラカー『ドイツ青年運動』50頁。
9　ラカー『ドイツ青年運動』117頁。
10　原田一美『ナチ独裁下の子どもたち』講談社、1999年、6頁。
11　原田『ナチ独裁下の子どもたち』7-8頁。
12　ナチ党およびドイツ国の「全国青少年指導者」、のちにヴィーンのナチ党大管区指導者。（平井正『ヒトラー・ユーゲント』217-218頁）ナチスドイツ期において、青少年の独占を目指した。1907生まれ、1974年死亡。
13　原田『ナチ独裁下の子どもたち』22頁。
14　原田『ナチ独裁下の子どもたち』61-62頁。
15　原田『ナチ独裁下の子どもたち』69頁。
16　原田『ナチ独裁下の子どもたち』69-70頁。
17　原田『ナチ独裁下の子どもたち』70-71頁。
18　原田『ナチ独裁下の子どもたち』72頁。
19　これはヒトラー自身がギムナジウム体制などのエリート教育体制を嫌っていたためであり、ヒトラーの考えがナチスの理念に反映している部分といえる。
20　原田『ナチ独裁下の子どもたち』74頁。
21　原田『ナチ独裁下の子どもたち』78頁。
22　原田『ナチ独裁下の子どもたち』79-80頁。
23　山本秀行『ナチズムの記憶』山川出版社、1995年、167-170頁。
24　中道寿一『君はヒトラー・ユーゲントを見たか？』南窓社、1999年、61頁。
25　中道『君はヒトラー・ユーゲントを見たか？』79-80頁。
26　中道『君はヒトラー・ユーゲントを見たか？』80頁。
27　中道『君はヒトラー・ユーゲントを見たか？』71-72頁。
28　中道『君はヒトラー・ユーゲントを見たか？』98-99頁。
29　中道『君はヒトラー・ユーゲントを見たか？』102-104頁。
30　中道『君はヒトラー・ユーゲントを見たか？』128頁。
31　デートレフ・ポイカート『ナチス・ドイツ―ある近代の社会史』木村靖二・山本秀行訳、1991年、三元社、232頁。
32　外国籍ではあるが、ドイツ民族に属する人びとをナチスはこう呼んだ。ドイツ語を話せない人も多かった。（原田『ナチ独裁下の子どもたち』195頁）
33　原田『ナチ独裁下の子どもたち』206-208頁。
34　原田『ナチ独裁下の子どもたち』208-211頁。
35　本節、とくに以下の３つの集団については原田一美『ナチ独裁下の子どもたち』155-190頁を参照した。
36　スーザン・キャンベル・バートレッティ『ヒトラー・ユーゲントの若者たち　愛国心の名のもとに』林田康一訳、あすなろ書房、2010年、152-153頁。

37　原田『ナチ独裁下の子どもたち』170-171頁。
38　原田『ナチ独裁下の子どもたち』189-190頁。
39　ハンス・ペーター・リヒター『ぼくたちもそこにいた』上田真而子訳、岩波書店、1995年、9頁。
40　リヒター『若い兵士のころ』。
41　ハンスーウルリヒ・ヴェーラー『ドイツ帝国 1871-1918年』大野英二・肥前榮一訳、未来社、1983年、403頁。
42　バートレッティ『ヒトラー・ユーゲントの若者たち』198-199頁。
43　ニュルンベルク裁判にはかけられなかったが、ドイツの民間法廷で裁かれた者はいた。
44　バートレッティ『ヒトラー・ユーゲントの若者たち』202頁。
45　バートレッティ『ヒトラー・ユーゲントの若者たち』212頁。

（卒業論文指導教員　丸畠宏太）